四

磐音はその足で宮戸川の仕事に出た。

風邪を引いていた次平じいさんも今朝は元気に出てきていた。

磐音ら三人の鰻割きはひたすら鰻の背を割く仕事に没頭した。

「今朝の旦那は、えらくおっかねえぜ。なんぞあったのかい」

と松吉が話しかけたが、磐音は黙々と作業を続けた。

その日に仕入れた鰻の仕込みが終わったとき、磐音は二人の仲間に、

「いま、親方にお断りするが、お二人には迷惑をかけることになる」

と前もって断った。

「なんでえ、勿体ぶってよ」

と松吉が応じたとき、井戸端に鉄五郎親方が姿を見せた。

「親方、坂崎の旦那が親方やおれたちに断っらなきゃならねえことがあるとよ」

「なんだね、坂崎さん」

磐音は片付けていた包丁を桶に戻すと、

「親方、大変世話になっておるのに心苦しいのだが、旧藩のことで国許に旅立つことになりました。真に持って申し訳ない」

「坂崎さん、いつかは帰参なさる日がくると思ってたが、それはまことに目出度いことだ」

「親方、早とちりしないでください。それがし、ゆえあって藩を去った以上、簡単に戻る訳にはいきません」

「なら、なんで国許なんぞに戻るんだよ」

松吉が口を尖らした。

「松吉どの、よんどころない事情で一時、国許に戻るだけだ。もし、わがままが許されるなら、江戸に戻った折、また鰻割きの仕事に戻りたいと考えている。親方、そんなわがままが許されますかな」

「坂崎さん、江戸を留守にするのは、どれくらいだね」

鉄五郎が磐音に訊いた。

「それがしの国許は西国九州です。急ぎ旅でも片道三十日はかかります。もしうまく事が済んだとしても三ヶ月か後、戻ってくるのは冬の時分です」

「松吉に次平、その三ヶ月の間、宮戸川の鰻割きはおめえら二人のてにかかっているんだぜ。坂崎さんが留守の間はおれも手伝おう。分かったな」

鉄五郎が松吉と次平に言い、松吉が頷くと、

「できるだけ早く戻ってきてくださいよ」

と言った。

「皆さんの志、肝に銘じて旅を急ぎます」

鉄五郎から日当のほかに餞別まで貰った磐音が宮戸川の裏口を出ると、幸吉とおそめが立っていた。

おそめの目は磐音が下げている包にいった。

「昨夜のうちにもどってくるかと思ったぜ」

幸吉のけえが尖っていた。

磐音が吉原で夜を過ごしたことを怒っているのだ。

「豆造はどうしたな」

幸吉の怒りには応えず、磐音はおそめに訊いた。

「明け方、泣きつかれて眠りました」

頷いた磐音は、二人に話があると、自ら先に立って泉養寺の境内へ誘った。急に疲れを感じた磐音は、階段にどっかと座った。

「おそめちゃん、これが約束のものじゃ」

包を渡すと、おそめが受け取った。

「よく聞いてくれ」

「なんでえ、遊んできた照れ隠しにごまかそうたって、そうはいかねえぞ」

幸吉が吐き捨て、おそめが、

「幸吉さん！」

と諌めた。

「幸吉どの、そなたの怒りもわからんではない。だがな、考え違いだ。豆坊のお父っつぁんとおっ母さんが死んだのだ」

「なんだって！今、なんて言ったんだい」

「だから、よく聞けと申しておる」

磐音は昨夜来、急転した出来事を二人に告げた。

二人は思いがけない事態に言葉もなく、呆然としていた。

「今日にも町奉行所から豆造の後見人に知らせが届こう。止めようと思ったが、止めきれなかった」

と磐音は心の蟠りのままに言った。

しばらく放心したように立っていたおそめの双眸が潤んで涙が溢れてきた。

「浪人さん、つまらねえことを考えてすまねえ」

と幸吉が詫びた。

磐音は頷き返した。

「お侍さん、それが一番良い方法だと考えられたんですね」

おそめが言い出した。

「どういうことだ。おそめちゃん」

幸吉がおそめに訊いた。

「弓七おじさんが刃物を持って吉原に乗り込み、おしずおばさんを傷つけた以上、もはや二人が一緒になれる場所はこの世にはない。だからお侍さんは、やくざ者が弓七おじさんとおしずおばさんを殺すのを見逃したのですね」

「そんな……ほんとかい、浪人さん」

「幸吉さん、お友達でしょ。お侍さんの気持ちくらい察して上げなさいよ」

おそめが叫ぶ。

「吉原のお女郎さんには大変なお金がかかっているのよ。おしずおばさんもそう。それを弓七おじさんは傷つけたのよ。どんな行き先が待っているかくらい、幸吉さんにも分かるでしょ」

「わかるけどよ、そんな悲しい道しかねえのか」

「すべては弓七おじさんが生み出した道よ。火焔の寅三って人がたまたま手を下しただけ。お侍さんにもだれにも止められなかったの」

「なんてことだい……」

幸吉が呟き、

「豆坊は、独りぼっちになったのねえ」

と言っておそめは風呂敷包みを抱きしめた。

「幸吉どの、いま一つ、そなたに話しておくことがある。それがし、急に国許に戻ることになった」

幸吉の顔が一瞬強張った。

「江戸を留守に致すのは三ヶ月には及ぼう。なにしろ、江戸から二百六十余里も離れているでな」

「金兵衛長屋に戻ってくるよね」

「必ず戻って参る。約定しよう」

幸吉の顔の強張りがいくらか柔らかいだ。

「なんて日だ」

幸吉が呟いた。

三人の耳に、泉養寺の境内で鳴く蝉の声が心なしか寂しげに聞こえた。

磐音が長屋に戻ると、早足の仁助が待っていた。

「東源之丞様の遣いにございます。坂崎様の江戸での用事、あと何日見ればよろしいかとの問いにございます」

「終わった。もはや長屋の大家どのと仲間に挨拶するくらいだ」

「なれば、明日にも江戸を発ってほしいとのお言葉にございます」

「よかろう」

磐音が承知し、仁助が頭を下げると、

「坂崎様、あっしも供をすることになりました。旅の間、なんでも用を申し付けてくだせえ」

と言った。

「旅慣れた早足どのと一緒なれば、心強い」

と応えた磐音が訊いた。

「ほかに東源之丞様のご指示はあるか」

「はい、江戸を発つ前に立ち寄る先があるとか。あっしが明朝ご案内することになっております」

「どこかな」

「それが、あっしもまだ聞かされてないので」

早足の仁助はそう応えた。

「ともあれ、７つ前にはこちらにお邪魔致します」

「相分かった」

磐音がそう返事をすると、早足の仁助は頭をぺこりと下げて金兵衛長屋から姿を消した。

磐音はまず部屋に上がると、鰹節屋から貰ってきた箱の上に並んだ三柱の位牌に報告した。

（琴平、慎之輔、舞どの、国許に戻ることになった。何が待ち受けておるか、知らぬ。見守ってくれ、頼む）

磐音は長いこと合掌していた。

磐音は六間湯に行くと江戸の垢を落とした。

その帰りに八百屋に立ち寄り、西瓜を買った。それをぶら下げて、北割下水の品川柳次郎の屋敷を訪ねた。

「なんですか、西瓜なんぞをぶら下げて」

所在なさげな顔で柳次郎が訊いてきた。顎に無精髭が生えているところを見ると、屋敷でごろごろしていたらしい。

「しばらく付き合ってくれませんか」

「こっちは暇を持て余しているんです。どこでも行きますよ」

独り身の気楽さ、古びた単衣に大小を差した柳次郎が、ちびた草履を履いて出てきた。

「竹村さんを誘って、一杯飲みたくてね」

「ほう、坂崎さんがね、珍しいこともあるもんだ」

二人は南割下水の竹村武左衛門の半欠け長屋に向かった。

相変わらず夫婦で袋張りの内職に精をだしていたが、友二人の呼び出しに武左衛門は、心からほっとした顔をした

「勢津どの、西瓜を買って参りました。お子たちと食べてくだされ」

「これはありがとうございます」

と勢津が頭を下げ、長男の修太郎が歓声を上げた。

磐音は、南割下水の辻に出ると、

「この刻限に酒を飲ませるところをどこか知りませんか」

まだ昼前なれば、蕎麦屋くらいしか開いておるまい」

と酒飲みの武左衛門が答えた。

「それでもかまいませんよ。どこか美味い蕎麦屋をご存じですか」

柳次郎と武左衛門が相談して、

「北辻橋際の三河庵に行くか」

と相談が纏まった。

竪川と横川を交差する北辻橋までは三人の足ですぐだ。

二階の広座敷に通された武左衛門が、

「親父、冷やで良いぞ。すぐに酒を持ってきてくれ」

と酒を注文した。

「今日の坂崎さんはちとおかしいな。顔に疲れが見える」

と柳次郎が言い、

「そういえば一睡もしてない顔だ」

と酒を注文して安心した武左衛門も言い添えた。

「昨夜は吉原に行きました……」

「なんと、艷っぽい話を坂崎さんから聞かされるか」

「竹村の旦那、そんな話じゃなさそうだぜ」

柳次郎が磐音に話の続きを促した。

磐音は吉原に行った経緯を二人に告げた。

「なんて話だ！」

「ただ働きどころか、身銭まで切って、やくざ者と命のやりとりか。っまことにもって坂崎さんらしいな」

と柳次郎と武左衛門が口々に言い、柳次郎が訊いた。

「残された豆造はどうなるのです」

「差し当たり、遅めの家で育てられる事になりそうです。おそめのところも子供が三人いるようですがね」

「４つか。すでに父と母の記憶があるだけに切ない話だな」

子持ちのぶざえもんが言ったとき、酒が来た。

女中が三人の杯に最初の酒を注いで、

「蕎麦はどうするね」

と訊いた。

「ｓれがしは、酒より蕎麦だ」

磐音が注文した。

「おふたりに同道ねがったのは、豆造一家の話をするためではない。それがし、急に国許に戻ることになりました……」

磐音は簡単に事情を告げた。

柳次郎も武左衛門もしばらく黙っていたが、

「三ヶ月か、寂しくなるな」

と呟いた。

「なあに、三ヶ月くらいすぐに過ぎる」

「竹村さんは勢津どのや子供にお聞かれられっ放しだからな。おれはどうしようもないぜ」

「そこでお二人にお願いがあります。今津屋より何ぞ仕事の話があったときは、これまで同様にお手伝いください。時には二人して、両国広小路の店に由蔵どのを訪ねてみてください」

「願ってもないことだ、なあ、柳次郎」

武左衛門が手酌で飲みながら言ったが、柳次郎はただ頷いただけだった。

三河庵に二人の友を残した磐音は、両国橋を渡って今津屋の前を素通りし、南町奉行所に年番方与力の笹塚孫一を訪ねて、江戸を留守にする報告をした。

南町の切れ者与力は御用部屋で、大頭から汗を滴らせながら訴訟の山と格闘していたが、

「そなたがいないとなると江戸は蝉の抜け殻だ。かさりとして、おもしろくもおかしくもないな」

と笑いもせずに言い放った。

「それにしてもそなた、江戸を離れて国許に戻るというのに、吉原で大立ち回りか」

さすがに南町奉行所の年番方与力だ。すでに吉原の事件を承知していた。

年番方とは、南奉行所二十五騎の与力中、古参有能の者が務める役職だ。古くは同心支配役与力が交代して務めたのでこう呼ばれた。つまりは、奉行所の上方が一手に集まる職務といえた。それにしても五尺そこそこの大頭与力は、何でも承知していた。

「火焔の寅三は、日光代官所領内で火付け強盗を重ねた極悪人だ。そなたは大手柄を立てたことになる。なんぞ褒美をと先ほどから考えていたところだ。残念じゃな」

と言った笹塚が、

「それにしても一つ気になることがある」

「なんでございますか」

「寅三には野分の勝五郎という兄貴分がいるはずだが、にっこうから追われたときにちりじりになったか」

と最後は自分に言い聞かせるように呟いた。

「ともあれ、また江戸に戻って参ります」

磐音が重ねて暇乞いをした。

「戻ってきても、羽織袴で鹿爪らしい勤番侍にかわっておるのではないか」

「それは皆に訊かれますが、心配無用に願います。再会の節はよろしくお願いいたします」

「南町奉行所でもそなたのことは頼りにしておる。そなたの行くところ、金になるでな」

とにたりと笑った笹塚が念を押した。

「そなたは浪々の身じゃな。旧藩の鑑礼など持っておらぬな」

「ございませぬ」

「待て」

磐音を待たして笹塚はしばらく中座していたが、手に書き付けを持って戻ってきた。

「南町奉行所の関所手形を持参せえ。なんぞの場合に役に立とう」

笹塚は、南奉行所牧野大隅守成賢の署名入りの関所手形をくれた。これまで磐音が南町奉行所のために働いた功績の代償に送ってくれたのだ。それは旅する浪人にとって何よりのものだ。

「道中気をつけてまいれよ」

笹塚の挨拶に送られて奉行所を出た。

最後に今津屋に挨拶した磐音は夕餉をご馳走になり、書き付けと餞別まで貰った。

帰り道、両国橋に差しかかったのは、４つの刻限を過ぎていた。

手には草鞋や手拭いなど旅仕度を持っている。

暑さがどんよりと淀んでいるせいで、もはや舟遊びの粋人も見かけなかった。行く手に、縞模様の単衣を尻端折りにして股引に草鞋履き、三度笠を目深に被って道中合羽を肩にかけた遊び人が一人立っていた。

きりりと締めた博多帯に長脇差が差し落とされている。

磐音には覚えのない人間である。

その傍らを通り過ぎようとした。

「待ちやがれ、さんぴん」

野太い声がした。

「金の持ち合わせがないこともないが、明日から入用なものでな」

「ぬかせ、兄弟分を牢送りにした仇を討たにゃあ、明日からこの世界では生きていけねえんだよ」

「野分の勝五郎か」

「知っていたか」

「先ほど南町奉行所で聞いたばかりだ」

「なにっ！てめえは奉行所の犬か」

勝五郎はそう誤解したようだ。

「迷惑至極な話じゃな」

磐音はそう言いながら、手にしていた包を橋の上に落とした。

野分の勝五郎も肩から道中合羽を払い落とすと長脇差を抜いた。

動きに無駄がなく敏捷だった。

磐音は徹夜した疲れを感じながらも包平を抜いた。

橋の真ん中、一間の間合いで二人は睨み合った。

勝五郎は右手一本に無造作に長脇差を保持していた。

その切っ先はだらりと橋板に向けられていた。

磐音は正眼に構えていた。

磐音の居眠り剣法は、この夜、どこか弛緩していた。

「行くぜ！」

野分の勝五郎が律儀に言うと、突っ込んできた。

一見、無鉄砲な長脇差捌きに見えて、度胸と力で修羅場を潜ってきた者だけが醸し出す迫力を備えていた。

磐音は、片手で殴りかかってきた迅速の剣を弾いた。

勝五郎は胴打ちから袈裟に変化させた。

それも磐音は弾き返した。

勝五郎はそれを見切っていたように長脇差を素早く振るって、磐音に反撃の機会を与えなかった。まるで初秋に吹き渡る野分のように、圧倒的な力で迫ってきた。

磐音は修羅場剣法に押されて後退していた。

かすり傷を何箇所も受けて、ようやく目覚めた。

居眠り剣法の本領を発揮して、攻撃を絡めとり、受け流し。

野分が焦れた。

ふいに風がやんで、勝五郎が自ら間合いの外に身を逃した。

磐音は正眼に戻した。

勝五郎は弾む息を強引に沈めると、長脇差を右肩に背負うように立てた。

数呼吸、二人は凝視し合い、同時に仕掛けた。

勝五郎の長脇差は唸りを生じて、磐音の肩口を襲った。

磐音の正眼の剣は突きに変じて、突進してくる勝五郎の喉元に伸びた。

刃渡り二尺に満たない長脇差と二尺七寸の長剣の差が生死を分けた。

備前包平の切っ先が勝五郎の喉を切り裂くと、

ぱあっ！

と血の花を夜の両国橋の上に咲かせた。

どさり

と勝五郎が崩れ落ちて、磐音は大きな息を一つついた。